九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

艾軒学派林光朝について

李，祥
九州大学大学院比較社会文化学府 ： 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/1650645

出版情報：中国文学論集. 44, pp.115-129, 2015-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

艾軒学派林光朝について

李　祥

はじめに

林光朝（一一一四－一一七八）、字は謙之、福建莆田（興化県）人。紹興五年（一一三五）と紹興八年（一一三八）の科挙試験に二度落第した後、尹焞（程頤の直接の弟子）の弟子たる陸景瑞（字は子正、生卒年不詳）の門人になり、儒学を学んでいた。その後、林光朝は莆田地域で多くの師弟に講学することによって、二程の学が莆田地域に広まった。そのため、林光朝は当地の人に「南夫子」と称され、また、当時の学者たちに「艾軒先生」と敬称された。さらに、彼を先達とする学派は後世「艾軒学派」と呼ばれたが、これまで、林光朝について、学術面においても、文学面においても、研究はまだ十分に展開されていない。本論文は、従来詳しく知られていない理学者としての林光朝を紹介した上で、特に彼の文学批評の方面から論述を加えたい。

一、理学者としての林光朝

林光朝の著作としては『艾軒集』が残されている。劉克荘（一一八七－一二六九）が書いた「艾軒先生集序」は、次の如く記述している。

先生乾淳間大儒、国人師之。朱文公於当世之学、間有異同、惟於先生加敬。[1]

先生（林光朝）は乾道淳熙年間の大儒であり、国人に師と仰がれた。朱文公（朱熹）は、当世の学派に対して、それぞれ異議が有ったが、ただ先生だけには敬意を示した。

周知のように、朱熹は同時代の他の理学派に対して、常に異なる見解を持っていた。心学を唱える陸九淵は言うまでもなく、湖湘学派の張栻、婺学の呂祖謙などに対しても批判したことがあった。一方、林光朝の学術に対しては、異論を出さなかった。『朱子語類』巻百三十二には、林光朝に関する記述がある。

某少年過莆田、見林謙之方次栄説一種道理、説得精神、極好聴、為之踊躍鼓動。退而思之、忘寝與食者数時。好之、念念而不忘。及至後来再過、則二公已死、更無一人能継其学者、也無一箇会説了。[2]

私は少年の頃莆田に行ったことがある。林謙之と方次雲（筆者注：「栄」は誤りで、「雲」が正しい）が一種の道理を説くのを見た。力強い説明で、極めて耳に心地よかった。そのため、踊躍し興奮した。帰ってからこのことを考えると、寝食もしばらくの間忘れてしまった。この楽しい思い出は、後になっても決して忘れるものではない。のち再び行くと、二公は已に死んでいた。其の学を継承できる者は一人もおらず、説く者も一人もいなかった。

朱熹は少年の頃から、林光朝の学術の魅力に引かれ、その後も彼と交流を続けて艾軒の言説を多く受け入れた。束景南『朱子大伝』（商務印書館、二〇〇三年）によると、朱熹が林光朝に敬服した理由は、学術面から言えば、次の二点がある。一つ目は林光朝が『詩経』の「毛序」に反対したこと。林希逸（一一九三－一二七一）の言葉を借りれば、「『毛序』は子夏によるものではなく、必ずしも毛公によるものでもない。渓西、艾軒二先生でなければ、そのような着眼点はない。」である。後に、朱熹が出した「毛序」に対する反論は、林光朝から影響を受けていたことは明白であろう。二つ目は、『周易』を聖人の経典と見なし、異論を許さなかった当時の雰囲気のもとで、林光朝

は『周易』がただ占いの書物にすぎないとはじめて提唱したこと。これは、当時大きな反響をもたらした。しかも、この論説は後の朱熹の象数派易学の前ぶれとなり、朱熹の易学が義理派から象数派へ変転したきっかけとなった。これらを踏まえて、束景南氏は次のように結論づけた。

朱熹在這次相見後便同林光朝結成了深厚的私交、書問往返不断、可以説朱熹後来経学思想上的重大飛躍都多少同艾軒有関[3]。

朱熹はこの出会いを通して、林光朝と個人的に深い交流を結んで、書簡の往還は絶えなかった。後の朱熹の経学思想上の重大な飛躍は艾軒と関係があるだろう。

林光朝の儒学は、莆田地域での講学を通して、後世に伝わったと同時に、当時の朱熹らのような学者にも影響を与えたのである。このことは『宋元学案』の編纂者が「艾軒学案」を独立した理学流派の一つとして取り扱っていることからも伺える。

和靖高弟、如呂如王如祁、皆無門人可見。塩官陸氏独能伝之艾軒、于是紅泉、双井之間、学派興焉。然愚読艾軒之書、似兼有得于王信伯、蓋陸氏亦嘗従信伯遊也。且艾軒宗旨、本于和靖者反少、而本于信伯者反多、実先槐堂之三陸而起。特槐堂貶及伊川、而艾軒則否、故晦翁于艾軒無貶詞。終宋之世、艾軒之学、別為源流。述艾軒学[4]案。

和靖の高弟、例えば呂、王、祁は、皆門人をもたなかった。ただ塩官の陸氏だけが艾軒に伝授した。そこで紅泉と双井の間に、学派が興った。然るに余は艾軒の書を読むと、王信伯のものも兼有しているようで、おそらく陸氏は嘗て信伯にも従って交遊していたであろう。しかも艾軒の宗旨は、和靖によるものは少なく、信伯によるものが多く、実に槐堂の三陸より先に起こったのだ。特に槐堂は伊川をも貶したが、艾軒はそうではなかった。故に晦翁は艾軒に対して貶する言葉は無かった。宋の終わりまで、艾軒の学は、独自の源流と為った。艾

軒学案と言う。

さらに、『宋元学案』においては当時における儒学の情勢を分析し、このように語っている。「在昔隆乾間、士之師道立、浙有東萊呂氏、建有晦庵朱氏、湘有南軒張氏、江西有象山陸氏、莆有艾軒林氏、皆以師道授、並世而立名者也。[5]（昔隆乾の間に、士の師道が確立し、浙には呂祖謙、建には朱熹、湘には張栻、江西には陸九淵、莆には林光朝がいた。皆師道を以って伝授し、世に並んで名声が立った）。」

以上、林光朝を祖とする艾軒学派は、当時流行していたことがわかる。林光朝自らが唱えた「践履の学」の中で最も注目されるのは「日用是根株、言語文字是注脚（日用は根本的なもの、言語文字はその脚注となる。）」という説である。清代の李清馥が編纂した『閩中理学淵源考』の中で、「文節林艾軒先生光朝学派」という項目があり、陳俊卿（一一一三－一一八六）と林希逸の言葉を引用し次のように説明している。「陳正献公曰閩中洛学之興、肇自建剣、而莆儒風之盛、自紹興以来四五十年、崇尚洛学、艾軒先生実作成之。林公希逸曰自南渡後、洛学中微、朱張未起、以経行倡東南、使知聖賢心不在訓詁者、自莆南夫子始[6]（陳俊卿が言うには、閩中洛学の興りは、建剣から始まった。一方、莆の儒風の流行は、紹興以来四五十年間、洛学を崇拝し、艾軒先生がそれを成し遂げた。林希逸が言うには、南渡の後、洛学が次第に衰微し、朱張はまだ起こっておらず、経学と行為を以って東南で提唱し、聖賢の心は訓詁にあるまいことを知らしめたのは、莆の南夫子からであった。）」

以上から見ると、林光朝の儒学は福建地方においても、南宋の学術全体、特に朱子との繋がりの面においても、不可欠なものであり、非常に重要な地位を占めていたということが明らかである。

二、林光朝の文学批評

林光朝の南宋儒学における重要性とともに、文学の面においても注意を払わなければなるまい。実際、彼の詩文における業績は早くから評価されてきた。例えば、明代の林俊（一四五二－一五二七）は艾軒の詩について、次の

ような論断を下した。

艾軒不独道学倡莆、詩亦莆之祖。用字命意無及者、後村雖工、其深厚未至也[7]。

艾軒は道学を莆田で倡えるのみならず、詩も莆田の祖である。用字と趣旨は及ぶ者がいない。劉克荘は巧みであるが、これほどの深さと厚さはない。

一方、艾軒の文章について、鄭岳（一四六八－一五三九）は「艾軒文選後序」の中に、以下の如く述べる。

若其文之高古、陳復斎劉後村俱有定評、晩生何敢置喙[8]。

彼の文章の高古さは、陳宓と劉克荘とが倶に高く評価したので、晩生にはこれ以上何も言葉は無い。

このように、林光朝の詩文は高い評価を得ていた。また、南宋当時、林光朝は詩の創作活動に積極的に参加し、楊万里（一一二七－一二〇六）とともに、詩社を作った。周揚波『宋代士紳結社研究』（浙江大学博士論文、二〇〇五年）では、楊万里『江湖集』の中の「送林謙之司業出為桂路提刑」という詩に着目し、この詩は一一七二年の作だと認定したうえで、林光朝と楊万里はその年に国子監で詩社を結成していた、と述べる。これに対して、陳小輝「楊万里結社考[9]」の考察によると、「送林謙之司業出為桂路提刑」詩は一一七三年の作であり、一一七〇年から一一七四年まで存在した「臨安詩社」の時期だと考えている。これらの考察から、林光朝と当時の詩人たちが詩社を結成して詩作に励んでいたことがわかる。

さて、楊万里『誠斎詩話』には、林光朝についても幾つか言及が見られる。例えば、「唐律七言八句、一篇之中句句皆奇、一句之中字字皆奇、古今作者皆難之。予嘗與林謙之論此事、謙之慨然曰、但我輩詩集中不可不作數篇[10]耳（唐の七言律詩は、一篇の中、句句皆奇で、一句の中、字字皆奇である。後の作者は皆これを難じた。私は嘗て林謙之とこの事を論じた。謙之は慨然として言った、私の詩集にはそのようなものは数えるほどしか無い）。」このように、

林光朝と楊万里の討論の様子が窺え、さらに林光朝自身の詩に対する考え方も窺えるであろう。また、林光朝の詩について、楊万里は非常に賛美し、以下のように言う。

自隆興以來、以詩名者、林謙之范至能陸務觀尤延之蕭東夫……前五人皆有詩集伝世[11]。

隆興以来、詩を以って著名である者は、林光朝、范成大、陸游、尤袤、蕭徳藻……この五人の詩集は皆世に伝わった。

つまり、林光朝を当時の四大詩人に並ぶと考えたのである。このように、林光朝の詩文は重要な価値があることは間違いないであろう。次に、視点を少し変えて、これまでの研究で全く注目されてこなかった彼の文学批評に焦点を絞って検討していきたい。

歐陽脩の『詩本義』は、詩序・毛伝・鄭箋という漢唐以来の『詩経』解釈の権威に対する本格的な批判として挙げられる。林光朝の「與趙著作子直」では、以下のように述べる。

『詩本義』初得之才廿五歳、如洗滌腸胃、読之三歳、旋覚得有未穏処。大率是歐陽二蘇及劉貢父談経多如此[12]。

『詩本義』を初めて見たのは二十五歳だった。体の中が洗い流されるかのようであった。三年間読みつづけ、まだ不穏当なところがあると思った。おおよそ歐陽、二蘇及び劉貢父が経を談ずる場合は多くこのようだった。

これは歐陽脩の『詩本義』に対する最も早い論評である。「二蘇」は蘇軾と蘇轍との兄弟を指し、蘇軾には『東坡易伝』と『書伝』がある。蘇轍にも、『詩集伝』、『蘇氏春秋集解』、『論語拾遺』など多くの経書の解釈著作がある[13]。劉貢父は劉攽（一〇二二－一〇八八）のことであるが、彼の経学に関する著作は現在残されていない。

林光朝はまだこの評論の性質を明白に意識しているわけではなかった。次にあげる朱熹のまとまった言説を踏まえると、この評論の特質が浮かび上がってくるであろう。

後世之解経者有三。一儒者之経。一文人之経、東坡陳少南輩是也。一禅者之経、張子韶輩是也[14]。

後世の経を解する者には三つある。一つは儒者の経。一つは文人の経、蘇東坡と陳少南の輩がこれに当たる。一つは禅者の経、張子韶の輩がこれに当たる。

このように、朱熹は後世の経学を解釈する人々を三種類に分けた。この三種類は後世の経学解釈においても妥当とされる考え方である。林氏は欧陽脩、蘇軾らの経学解釈の弊害を体験したが、彼らを「文人の経」に類別する意識はまだ持っていなかったようだ。しかし、林光朝の概括は朱熹にヒントを与えたであろう。或いは、二人の意見は見えざる所でつながっていたのかも知れない。それ故、清初の王士禎（一六三四－一七一一）の『池北偶談』巻十六には、この論説が引用され、さらに四庫館臣は『詩本義』の提要の中に、林光朝のものに基づいた王士禎の論説を引用して、以下のような論述を加えた。

蓋文士之説『詩』、多求其意。講学者之説『詩』、則務繩以理。互相掊擊、其勢則然[15]。

おもうに文士の『詩』の解釈は、多くは其の意を求める。講学者の『詩』の解釈は、則ち論理を以って構築することを求める。互いに攻撃し、其の情勢は常にこのようになる。

「文士説『詩』」、「講学者説『詩』」という内容からみると、四庫館臣のこの論述は、欧陽脩らの「文士説『詩』」という林光朝の論評と、「文士説『詩』」と「講学者説『詩』」と区別があるという朱熹の説を整合させて、統一したのである。そうした流れの中に、林光朝の存在は見逃すことはできないと考えられる。

一方、韓愈と柳宗元、及び蘇軾と黄庭堅に対する林光朝の論評もかなりの関心を集めた。

蘇黄之別、猶丈夫女子之応接。丈夫見賓客、信歩出将去。如女子則非塗澤不可。韓柳之別、則猶作室。子厚則先量自家四至所到、不敢略侵別人田地。退之則惟意之所指、横斜曲直、只要自家屋子飽満、不問田地四至、或

在我与別人也[16]。

蘇と黄の別は、宛も成年の男子と女子の応対のようだ。男子が賓客と会見するには、そのまま歩いて出迎える。女子なら、則ち化粧しなければならない。韓と柳の別は、則ち家屋を建てる時のようだ。子厚は先ず自分の家の四隣を量り、他人の田地には少しも侵入しない。退之は則ちただ意の指す所に任せ、横斜曲直、ただ自分の家の満足だけを求める。自分の土地か隣人の土地かを気にしない。

蘇と黄の区別は男子と女子の応対に対する差異のように、韓柳の区別は家を作る際の策の差異のようであるとする比喩は極めて想像力に富み、詩文の抽象的な個性をイメージ化した言葉で、その様子がいきいきと伝わってくる。銭鍾書の『談藝録』は、林光朝のこの文章を引いて、次のように論述を加えた。

林謙之光朝『艾軒集』巻五「読韓柳蘇黄集」一篇、比喩尤確。其言曰：……中略（林光朝文章）……。即余前所謂侵人拡充之説。子厚与退之以古文斉名、而柳詩婉約琢斂、不使虚字、不肆筆舌、未嘗如退之以文為詩。艾軒真語妙天下者[17]。

林謙之光朝『艾軒集』巻五「読韓柳蘇黄集」の一篇は、比喩が尤も的確である。……中略……。これは私が以前唱えた侵入拡充説と同じである。柳宗元と韓愈は古文において名を斉しくした。柳詩は婉曲で琢磨され、虚字を使わず、冗舌でなく、韓愈のように文を以って詩を作ることはなかった。艾軒は真に語を用いるのが絶妙である。

以上のように、銭鍾書は林光朝のこの論説を絶賛している。さらに、銭氏は該書の中に、この論説が後世において変貌してゆく形を整理している。

漁洋『池北偶談』引作「譬如丈夫見客、大踏歩便出去。若女子、便有許多粧裏。」子才隠本漁洋而増飾下一語為

「如女子見人、先有許多粧裏作相。」『小倉山房尺牘』巻七「昔人論詩、道蘇東坡如名家女、大脚歩便出、黄山谷縮頭拗頸、欲出不出、有許多作態。」……巻十「再答李少鶴」「宋人詩話説。東坡如宦家女、大脚歩便出。涪翁詩如小家女、拗項折頸、有許多做作。」蓋匪徒由「信歩」而放足為「大踏歩」、為「大脚歩」、亦復由「丈夫」而変形為「名家女」、「宦家女」……随園著作風行、流俗輾転稗販、全失艾軒原語之真[18]。

漁洋『池北偶談』はこう引用した。「例えば、男子が客と会見するには、大またで歩いて出てゆく。女子なら、すなわち多くの化粧がいる。」子才は漁洋に基づいていることを隠して而も増やして飾って一言を為す「例えば、女子が人に会う時、先ずしっかり化粧して表情を作る。」『小倉山房尺牘』巻七には「昔の人は詩を論じて言った。蘇東坡は名家の女の如く、大またで歩いて出かける。黄山谷は頭を縮めて頸を拗けて、出ようともしない。わざと姿勢を見せることが有る。」……巻十「再答李少鶴」には、「宋人の詩話に言う。東坡は官僚家の女の如く、大またで歩いて出かける。涪翁の詩は小家の女の如く、頸を拗けて、わざとらしいことが多い。」思うにただ「信歩」から「大踏歩」となり、さらに「大脚歩」となった。またふたたび「丈夫」から変形して「名家女」、「宦家女」となった。……随園の著作が流行して、凡俗は輾転販売して、艾軒の元の語の真の形をすっかり失った。

林光朝のこの比喩は後世の批評家に頻繁に引用され、蘇軾と黄庭堅を区別し、「蘇黄」評の中で最も注目される評論となった。時代とともに、言葉は多くの人を通過すると、元の形を失ってしまう。それにもかかわらず、林光朝のこの論評は後世に典型的なものとして扱われ続けたのは疑いの余地がないと考えられる。

次に林光朝の文学評論の中で「気」に関する論説を取り上げよう。「気」という概念は、孟子の「浩然の気」を発端とし、後世に広まった。儒学であれ、詩文創作であれ、「気」自体、また「気」への追求と保持方法、「気」の働くメカニズムの解明などは、よく問われる対象である。

さて、ここではまず焦点を少し移して、「艾軒学派」の弟子である劉克荘に視線を向ける。劉克荘は詩文創作の面においても、自身なりの「気」に関する理解と論説を示した。彼が書いた「詩境集序」にはこのような記載がある。

「昔之評文者曰、『文以気為主。』又曰、『気盛則言之短長与声之高下皆宜。』本朝評東坡文者衆矣、往々称其天才超軼、筆力浩大而已。至我阜陵独曰、『気高天下、乃克為之。』嗚呼、阜陵之言、可謂尽坡公之平生矣。[19]」（昔の文を評する者曰く、「文は気を以って主と為す。」又曰く、「気が盛んなれば、則ち言の短長と声の高下は皆宜し。」本朝は東坡の文を評する者衆く、往々にして其の天才超軼と筆力の浩大を称するのみ。我が阜陵（孝宗）のみ独り曰く、「気は天下よりも高ければ、乃ちよく之を為す。」嗚呼、阜陵の言は、坡公の平生を尽くすと謂うべし。）

以上、彼は「文以気為主」という先人の説を受け入れると同時に、孝宗皇帝の「気高天下」という東坡評にも賛成しているが、ここにはまだ彼独自の見解は見られなかった。しかし、次の「気」に関する記述から見ると、劉克荘の独自の「気」の理念が浮かび上がってくる。劉克荘「仲弟詩跋」には、

詩比他文最難工、非功専気全者不能名家。……頃遊江淮幕府、年壮気盛……未両考得詩三百……然已避謗持戒、余十年間一句一字不敢出吻、非曰才尽、胆薄而気索矣。[20]

詩は他の文体よりも難しい。功をつみかさね、気が万全な者でないと、名家にはなれない。……昔私は江淮幕府に遊び、壮年で気が盛んで……二年で詩三百首を得た……しかし已に謗りを避け、戒めを持して、余は十年間で一句一字も敢えて口に出さなかった。才が尽きたのではなく、胆力が薄れて気が尽きたのである。

このように、詩文を創作する際の「気」は若い頃の「年壮気盛」や「胆」を指し、詩文創作の衰えは「才」とは関係ないのである。それ故、「江湖詩禍」を蒙った劉克荘は「気索」になって、十年余り、詩を創りださなかった。劉克荘は自らの経験を述べるだけでなく、他人の例も援用したが、同じ結論に至ったのである。劉克荘の「劉圻父詩序」に、以下の如く記述される。

文以気為主、少鋭老惰、人莫不然。世謂鮑照、江淹晩節才尽、余独以為気為有惰而才無尽。[21]

文は気を以って主と為す。若い頃は鋭く、老いてから惰気になる。人は皆このようである。鮑照、江淹が晩年

になって才が尽きたと世は謂った。これは気が惰になり才が尽きたのではないと思う。

劉克荘は鮑照、江淹を例として、詩人たちが晩年になって、「鋭気」がなくなると同時に、傑作が作れなくなったと述べた。創作の質も「才」とは無関係で、世間の「江郎才尽」という通説に反した。

劉克荘のこの斬新的な「才無尽」「胆」「鋭気」「年壮気盛」論は文学批評史上重視すべきであろう。ただ注目すべきは、劉克荘のこの重要な論説の源を遡ると、林光朝に至るということである。『宋元学案』巻四十七「艾軒学案表」によると、劉克荘のもう一つの身分は林光朝の三伝弟子である。劉克荘文集の中で、林光朝の古文と詩を賞賛することは少なくない。その詳細は次節に譲るが、ここでは、ただ宋末元初の劉壎（一二四〇－一三一九）『隠居通議』巻三の記載を挙げる。

予少時熟観劉後村集、見其推重艾軒林公甚至、且並及其伝者、網山楽軒之属。其称林公或曰老艾。予極慨慕其人、恨不見其著述也[22]。

予は少年の時劉後村集を熟読し、彼が艾軒林公を甚だ重んじていることを知った。且つ其の伝えた者にも及び、（彼らは）網山楽軒の属である。彼は林公を老艾と称した。予は其人を極めて敬慕し、其の著述が見られないことを恨む。

このように、劉克荘は艾軒学派に属し、林光朝の学問と詩文に親しんだことが分かる。そして、林光朝の以下の論述から見ると、前述した劉克荘の観点は彼の説を吸収したと見られる。

文章蓋主乎気、而臣渋桑楡之累、則正気已索。訓辞欲近乎雅、而臣抱山林之学、則大雅或虧[23]。

文章はけだし気を主とするものである。しかし臣は晩年の累に渋って、則ち正気がなくなった。訓辞は雅に近づくことを理想とする。しかし臣は山林の学を抱いて、則ち大雅にかけてしまった。

林光朝は文章の「気」を主とし、晩年には「気索」になって、文章の水準が下がってきたと述べている。換言すれば、若い頃の「気」が文章を作るには非常に重要な存在である。そうすると、前述した劉克荘の「年壮気盛」と「鋭気」等の「気」に関する論説はこれに基づく可能性が極めて高いと考えられる。

以上、林光朝の文学批評について三つの観点から述べてきた。このことは従来あまり言及されていない林光朝文学の一側面である。

三、同時代及び後世からの評価

以上考察してきたように、林光朝は南宋儒学と文学において、重要な地位を占めていた。実際、当時及び後世においては、林光朝の文学に関する評価はいずれも高い。

まず、同時代では、前文でも述べたように、楊万里の評価が挙げられる。また劉壎『隠居通議』巻三には、

周益公銘其墓、公学造深醇、所為文奥雅篤厚、刊落華腴、而宿於理……大概直是一博洽之儒、醇正之作、尤深於経者。其蒼勁処非浅学能及。[24]

周益公（周必大）は彼（林光朝）の墓誌銘を書いた。公の学は深くて芳醇であった。作った文は奥深く典雅篤厚であり、華やかさや余計なものを削り、而して理に宿った。……大概一人の博識の儒者であり、作が純正で、尤も経に深い者だ。その力強さは浅学には及ばない。

このように、南宋時代の詩文大家である楊万里と周必大は、林光朝に対してそれぞれ評価していた。後に、「艾軒学派」の弟子である劉克荘と林希逸もそれぞれ評価していた。その代表的なものを取り上げてみる。劉克荘は「艾軒先生集序」の中で、次のように述べる。

以言語文字行世、非先生意也。然先生学力既深、下筆簡厳、高処逼「檀弓」『穀梁』、平処猶与韓並駆[25]。

言語と文字を以って世に流行したのは、先生の意ではなかった。然るに先生の学力は深く、筆を下すのは簡潔で厳正であった。高くは「檀弓」『穀梁』に逼り、近くは韓愈と並走するものである。

劉克荘のこの評論は少し過褒かもしれないが、艾軒の文章が当時強い影響力があったことが伝わってくる。林希逸の「丘退斎文集序」にはこのように記述される。「老艾一宗之学、固非止於為文、而艾軒之文視乾淳諸老為絶[26]出（老艾は一つの学派として、固より文を為すことに止まらない。艾軒の文は乾淳の諸老（朱熹、陸九淵、陳亮、葉適など）より傑出していた）。」艾軒の文章は儒学と文学大家が頻出した乾道淳熙期でも傑出したことを述べるのである。

明代では鄭岳と林俊の説がその代表的なものとなるが、また謝肇淛（一五六七－一六二四）『小草斎詩話』においては、林光朝の「乞竹鶏」、「冬至」、「徐広文生朝[27]」という三首の詩の各首聯を取り上げ、以下のように述べる。

林艾軒以道学名、而歌行亦効長吉、如……（三首の詩の首聯）……皆奇俊可喜、惜其篇什不多[28]。

林艾軒は道学を以って名があったが、歌行は長吉に倣い、たとえば、……皆奇しくすぐれて喜ぶべきだったが、ただ篇数の少なさが惜しまれる。

謝肇淛は林艾軒の詩に李賀の影響を見いだし、高く評価した。また、『艾軒集』に収録された詩文の量が少ないことを嘆いた。後の清朝では、『宋元学案補遺』巻四十七に、

後村称其文高迫「檀弓」、平亦駆韓、固過情之論、要是南宋一作手[29]。

後村が其の文の高さは「檀弓」に迫り、韓愈と並走すると称したのは、まことに過情な論だが、要するに彼は南宋の一人の代表的文学者であった。

以上、歴代の評論を幾つか取り上げてみた。南宋時代以後も、林光朝の詩文はこのように重視されていたのである。

おわりに

南宋以降、恐らく林光朝文集の散逸のため、彼の影響力は次第に忘れ去られた。現存する唯一の林光朝の著作である『艾軒集』は明代に編纂され、僅か十巻（付録一巻を含む）の分量を持ち、其の中に収録された作品数も多くない。そこで本論文は林光朝の文学批評に注目し、当時と後世の評価を取り上げて、彼の学術史上における重要性を明らかにした。文学史においても、林光朝は看過できない人物なのである。

注

（1）辛更儒『劉克莊集箋校』（中華書局、二〇一一年）第九冊、三九八〇頁。
（2）黎靖徳編・王星賢点校『朱子語類』（中華書局、一九九四年）第八冊、三一七七頁。
（3）束景南『朱子大伝』（商務印書館、二〇〇三年）、一二七頁。
（4）黄宗羲著・全祖望補修『宋元學案』（中華書局、一九八六年）第二冊、一四七一頁。
（5）同右、一四八一頁。
（6）李清馥『閩中理学淵源考』巻八、文淵閣四庫全書本。
（7）同右。
（8）林光朝『艾軒集』巻十、四庫全書珍本初集、商務印書館。
（9）陳小輝「楊万里結社考」、江西広播電視大学学報、二〇一三年第四期。
（10）辛更儒『楊万里集箋校』（中華書局、二〇〇七年）第八冊、四三五四頁。
（11）同右、四三五九頁。

(12) 林光朝『艾軒集』巻六、四庫全書珍本初集、商務印書館。
(13) そのほか、蘇轍の経学書に『孟子解』という書物もある。しかし、『孟子』は南宋時代に入って朱熹によって十三経の列に入れられたので、林光朝の当時は、『孟子』はまだ経書ではない。
(14) 黎靖徳編・王星賢点校『朱子語類』(中華書局、一九九四年)第一冊、一九三頁。
(15) 永瑢等撰『四庫全書総目』(中華書局、一九六五年)一二一頁。
(16) 林光朝『艾軒集』巻五、四庫全書珍本初集、商務印書館。
(17) 銭鍾書『談藝録』(三聯書店、二〇〇一年)、九七頁。
(18) 同右、五三三頁。
(19) 辛更儒『劉克莊集箋校』(中華書局、二〇一一年)第九冊、四〇九八頁。
(20) 同右、四一七七頁。
(21) 同右、三九七〇頁。
(22) 劉壎『隱居通議』巻三(叢書集成初編、商務印書館)、二五頁。
(23) 林光朝『艾軒集』巻二、四庫全書珍本初集、商務印書館。
(24) 注(22)に同じ。
(25) 注(1)に同じ。
(26) 林希逸『竹溪十一稿続集』巻二十、文淵閣四庫全書本。
(27) 『艾軒集』巻一には、「乞竹鶏」と「冬至」と「徐広文生朝」との三首の詩の各首聯は「疎籬短短花枝闌、鳩婦不鳴天雨寒」、「横枝凍雀昨夜死、水底黏魚吹不起」、「盤古一笑鴻蒙開、神馬負図従天来。」とある。
(28) 張健輯校『珍本明詩話五種』(北京大学出版社、二〇〇八年)、三八二頁。
(29) 王梓材・馮雲濠撰『宋元學案補遺』巻四十七(世界書局、一九六二年)、「艾軒学案補遺」。